

不登校及び登校しぶり児童への対応について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校の中学年から登校しぶりが始まり、6年生で不登校となった。登校しぶりの日が続いたり、連続して欠席したりするなど不安定な状況が継続し、登校した時は、教室と校内別室を行き来して過ごしている。体調不良の時は、オンライン授業を活用し、学習している。

具体的な取組

○学校行事などを契機に支援

移動教室、運動会の学校行事で役割を担い、当該児童の満足感・達成感が得られるように支援を行った。それ以降、校内別室登校の日数が増えた。



○友達と関わるができる部屋・静かに過ごせる部屋

児童の希望に沿って、静かに過ごせる部屋、友達と関わるきっかけをつくれる部屋を用意した。

心身の安定を図りながら、友達と過ごす時間が増えた。



○在籍教室との連携支援

登校後、教室と校内別室を行き来する当該児童に対して、教員や支援員が付き添い、当該児童に寄り添える体制を整えた。「困った時には私のそばに来てくれる」という安心感が生まれ、連続での欠席が解消した。

○登下校時の保護者負担を軽減

毎日、登下校時の付き添いを行うことに負担を感じている保護者に対しては、校内別室指導支援員のシフトを工夫したり、家庭と子供の支援員と連携したりすることで保護者の負担を軽減した。この取組により登校の日数が増えた。

成果

児童のニーズに応じた校内体制を整えることにより、児童2人の生活リズム改善を支援できた。また、保護者の登下校負担を軽減することで、登校日数の増加とともに、児童・保護者と学校の関わりを継続したり深めたりすることができた。

課題

中学校への支援の継続が課題である。同じ環境や人員配置ではない中で、継続した登校を目指した居場所の提供を引き継げるようにしていく。

生徒の状況に応じた細やかな対応について

不登校生徒の状況

中学校入学時は登校していたが、1年生の2学期以降、学級の騒がしさを理由として、欠席が続くようになった。欠席が長期化する前に校内別室の使用を開始し、静かな環境で自学自習を行う事で、開室時間に合わせ、安定した別室登校ができています。

具体的な取組

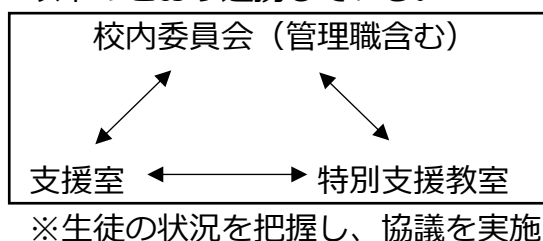
○校内別室指導支援室の開設

以下のとおり別室を開設している。

- ・ 開設日 火曜日～金曜日
- ・ 開設時間 午前9時～午前11時
- ・ 内容 自主学习
オンライン学習

○特別支援教室との連携

以下のとおり連携している。



○情報の共有化

校内別室指導教室は2名で担当し、以下のとおり生徒の様子を情報共有して把握している。

⑥校内委員会で対応方針を検討

①利用生徒の活動を記録（以下日誌）

②日誌を回覧し、情報の共有

※支援員→生活指導主任→特別支援
教育コーディネーター→管理職

③支援員から担任へ連絡

④担任から学年へ報告

⑤校内委員会での協議

○校内別室等対応の組織

以下のとおり組織している。

- ・ 校内別室指導支援員による支援
- ・ 学校巡回支援員による支援
- ・ 学年教員による学習支援
- ・ 放課後個別支援
- ・ オンライン学習の支援
- ・ 学校と家庭の連携推進事業支援員による支援



成果

- ・ 対象生徒の安定した登校
- ・ 校内委員会と教職員との連携強化
- ・ 担任と生徒の関係性の構築

課題

- ・ 校内別室指導支援室利用者数を増やす取組を行う
- ・ 開設時間を伸ばし、常時開設できるように支援員を確保する

校内別室指導員の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、通常の学級に入学し、医師から自閉症スペクトラムの診断があった。入学当初から集団行動や学習の遅れ、忘れ物が多く、家族の支援もあったが、うまく対処できないことで精神的にも不安定になっていった。教室への行きしぶりや登校が安定せず、校内別室の利用が始まった。

具体的な取組

○校内別室利用記録の作成

校内別室指導支援員は、校内別室利用時の生徒の学習状況や会話の内容などを記録し、担任・学年教員や専門員へ情報を提供している。支援員が日替わりで担当するため、引き継ぎ資料としても活用している。

○生徒のスケジュール管理

職員室に別室利用生徒の一日の動きを確認できるホワイトボードを設置し、登校時間の確認や給食の有無、特別支援教室での指導時間など、教員が確認できるようにしている。



○学習支援と心の支援

オンライン授業時の見守り、課題の受け取りや提出時の支援のほか、数学の個別指導を行っている。作文など苦手な活動は、支援員との会話から当該生徒の考えを引き出し、地道に取り組んでいる。



○特別支援教室との連携

特別支援教室専門員との情報共有を行い、具体的な支援方法の助言を受け、頑張ったことを褒めたり、苦手なことにも挑戦できるように励ましたりし、自尊感情の醸成にも努めている。

成果

不登校生徒の安心できる居場所を提供し、校内別室指導支援員が寄り添い、見守る存在として、学習支援の充実や生徒の心に寄り添ったきめ細かな心の支援ができるようになった。

課題

校内別室の開室時間の拡充に伴う、支援員の確保が課題である。

登校しぶり、教室で授業に参加できない児童への対応について

不登校児童の状況

当該児童は、小学校 6 年生であり、低学年の頃から登校しぶりがあり、保護者が付き添い登校していた。登校できても、保護者と離れることができず、保護者が廊下から見守り授業を受けることが多かった。5 年生の途中から、保護者と離れられるようになってきたが、授業を教室で受けることは難しいことが多く、廊下や保健室などで過ごしていた。

具体的な取組

○校内別室の活用

不登校児童の支援として校内別室が開設されたことで、当該児童が安心して過ごせる居場所ができた。

このことにより、登校を渋ることが減った。



○保護者との電話連絡・面談

電話連絡と面談を定期的に行い、保護者との連携を密にした。学校での様子を伝え、家庭でも振り返ったり、学校で過ごす上での約束を共有したりすることは有効だった。また、家庭での様子を聞いたり、医療機関での情報を共有したりして支援に役立てた。

○学校行事への参加を目標に支援

移動教室や運動会などの行事への参加は当該児童、保護者共に前向きであった。そのため、行事の準備や練習が始まった際には、教科の授業は校内別室で過ごし、行事に関係する内容の授業は、教室で一緒に参加する形式を取り、当該児童の負担を減らすよう支援した。

○校内の先生の声掛け

支援教室が設置されているため、当該児童は支援教室には通っていないが、支援教室の先生方をはじめとして、養護教諭や特別支援教室専門員など、教職員が関わった。関わりの多い教職員には、支援員が当該児童の情報を適宜伝えた。

成果

当該児童のニーズに応じた支援態勢を整えたことで、6 年生になってからは、保護者の付き添いなしで友達と学校に通えるようになっている。また、6 年生の移動教室、運動会、音楽会といった大きな行事についても全て参加できている。

課題

校内別室の支援員は現在一日 1 人の体制であり、支援員の増員などの校内体制を整備することが課題である。

校内別室指導支援員活用について

不登校児童の状況

対象児童は、4年生から欠席が継続している5年生であり、SCとの相談から、校内別室の利用が始まった。図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。校内別室で過ごすことで欠席率が下がり、教室へ給食を取りに行けることが続くようになった。2学期は校内別室にいる時間が減り、教室にいる時間が増えた。

具体的な取組

○支援計画

利用開始より、一人一人の支援方針等を明確にするために、校内委員会の開催、利用の適正を判断後、「個別支援計画」を学期ごとに策定している。併せて、「支援記録」を作成し、一人一人の支援状況を学校全体で共有・効果的な支援につなげている。

※ 各学年の支援計画は、学年主任が作成し、支援員が活用する。

氏名	学年	支援計画	支援員
山田 太郎	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員A
佐藤 花子	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員B
鈴木 一郎	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員C
田中 美咲	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員D
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員E
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員F
渡辺 翔太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員G
山崎 明日香	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員H
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員I
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員J
渡辺 翔太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員K
山崎 明日香	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員L
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員M
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員N
渡辺 翔太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員O
山崎 明日香	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員P
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員Q
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員R
渡辺 翔太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員S
山崎 明日香	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員T
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員U
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員V
渡辺 翔太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員W
山崎 明日香	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員X
佐々木 健太	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員Y
高橋 未来	5年	図工の課題や個別支援を組み合わせで支援している。	支援員Z

○支援体制

校内別室指導支援員を中心に、学習支援員等も加わり、常時、学習支援や自立支援など一人一人の必要に応じた支援ができる体制を整備している。また、学級担任との連携、SC・SSWなど心理・福祉の専門家に相談し、個のニーズに合わせて支援できるようにしている。

○利用時間

利用児童に合わせて、利用時間を相談して、利用できる。教室に入らずスマイルで終日過ごすことができる。学校と家庭の支援員の家庭訪問により一緒に登校し、登校後からも利用できる。また、教室にいることがつらくなった時に校内別室を利用し、教室へ戻る利用も可能としている。

○過ごし方

教育支援センターと同様に、最大限に間口を広げ、いつでも通室できるよう開室している。一人一人のニーズを的確に見取り、オンライン授業への参加、プリント学習、図画工作科や音楽科など、可能な限り柔軟な対応を行っている。

成果

現在までに活用した児童は9人である。3人は教室へ復帰しており、6人は利用が継続している。教室とは違う空間をつくること、支援員、学級担任等との連携を強めることなどにより、欠席も少なくなり、登校意欲が高まり、教室にも気持ちが向き始めている。

課題

家庭に起因する事案も多く、支援員と学級担任との連携、SC・SSWの連携など心理・福祉等の連携強化の継続が必要である。